

# 平成 17 年度最終報告書

(様式 10)

被助成者 ジュマ・ネット代表 下澤嶽



コード番号

05-A-215

## チッタゴン丘陵先住民族持続的社會開発プロジェクト 17 年度報告

### <報告要約>

2003 年 8 月、バングラデシュ、チッタゴン丘陵地帯のカグラチャリ県マハルチャリ郡で、ベンガル人入植者と軍が、先住民族の村々を襲撃する事件が起こった。400 軒の家が焼き討ちされ、10 名の女性がレイプ、2 名が死亡するなど大きな被害となった。1997 年に先住民族グループとバングラデシュ政府の間で和平協定が結ばれて以来の最大の事件となり、チッタゴン丘陵地帯にまだ完全な平和が訪れていないことを証明した。ジュマ・ネットと現地パートナー団体である PBM はただちに緊急救援活動を行い、その後現地視察をしたところ被害が深刻であることがわかり、2004 年から 3 年間を目標に、特に被害のひどい世帯を中心に経済復興支援活動を展開することとした。庭野平和財団の助成を受け、1 年目、2 年目の事業が無事完了した。

事業は 1 年目に引き続き、果樹の植林、女性のための織物センター、こどもの奨学金、コミュニティーの安全と結束のための集会などが行なわれた。全体では順調に進んだものの、織物センターのみが女性たちの希望と現地パートナーの PBM の折り合いがつかず、運営がストップしてしまった。本来、レイプなどの被害の大きかった女性たちの自立支援が目的であったため、その分の予算を凍結し、女性たちの収入向上のためのクレジットサポートへと変更した。また 2 年目の特色として、被害の大きかった世帯を対象に、小規模商業活動を行うためのクレジットサポートを行なった。

2 年間で復興事業は順調に当初の目的を果しつつある。PBM と村人が協力し、襲撃事件で受けた経済的な被害をある程度のところまで復興できたと言える状態を現地で確認することが出来た。しかし、この地域で UNDP (国連開発計画) が大規模な開発事業を始めたため、ジュマ・ネットの活動と重なる部分が出始めてきた。そのため 3 年目の活動をこれ以上同様の事業を継続する必要がなくなりつつあると、考えている。ただ、襲撃事件で深刻な被害を受けた世帯が残っており、その世帯への部分的な支援をジュマ・ネットとして考えたい。

## 背景

このプロジェクトは、バングラデシュ、チッタゴン丘陵地帯において、2003年8月にベンガル人入植者と軍から襲撃を受けたカグラチャリ県マハルチャリ地域の先住民族被害者 268 世帯の復興を目指して始められたものである。事件当時は、400軒の家が焼かれ、10名の女性がレイプ、2名が死亡するといった大きな被害がでた。1997年に先住民族グループとバングラデシュ政府の間で和平協定が結ばれて以来の最大の事件となった。この事件はまだチッタゴン丘陵地帯に完全な平和が訪れていないことを証明した。

ジュマ・ネットと現地パートナー団体である、PBM はただちに緊急救援活動を行い、その後現地視察をしたところ被害が深刻であることがわかり、2004年から3年間を目標に、特に被害のひどい世帯を中心に経済復興支援活動を展開することとした。庭野平和財団からの助成金支援もあり、1年目、2年目の活動を無事完了することが出来た。

名称：チッタゴン丘陵先住民族持続的社會開発プロジェクト

プロジェクト期間：2004年8月～2007年7月の3年間の2年目

プロジェクト地域：バングラデシュ、カグラチュリ県マハルチャリ郡

プロジェクトの目標

- 植林、集約的な菜園農業の普及などを通じて収入と雇用の機会をつくる。
- 経済的な自立とエンパワーメントのために、小規模のビジネスや手工芸品の生産を通じて機会の少ない先住民族に現金収入の機会をつくる。
- 先住民族を団結させ、自分たちの力で問題解決できるよう力づけを行う。

プロジェクトの受益者：

#	村	モウザ	ユニオン	襲撃被害者家族数
1	Basantapara	Keraganal	Mahalchari	22
2	Headmanpara	Keraganal	Mahalchari	43
3	Pahartali	Durpajjanal	Mahalchari	27
4	Saw-Millpara	Thalipara	Mahalchari	31
5	Babupara	Thalipara	Mahalchari	50
6	Ramesupara	Thalipara	Mahalchari	33
7	Lemuchari	Kayanghat	Kayanghat	62
	<b>Total:</b>			<b>268</b>

## プロジェクト実施報告

### (1) 全体状況

2005年度は、マハルチャリ襲撃事件被災者支援活動の2年目にあたった。現地 NGO である PBM

(Parbatya Bouddha Mission) と共同で、268 世帯の被災世帯を対象に、植林用の苗の配布 (100 世帯)、被害女性を対象とした織物センターの運営 (約 10 名の女性)、小額ローンの貸し出し、児童を対象とした奨学金 (100 名) の配布を行った。

事業全体は比較的順調に推移した。しかし、織物センターは、女性側の要望と運営する PBM 側との意見が合わず、プロジェクトの再調整が必要となった。双方の折り合いがなかなかつかず、近隣のカルバリパラの女性たちがこのセンターに関心を持っていることがわかったので、今後はこの地域の女性たちを対象とした織物センターとして再スタートをする予定である。そのため 2005 年度内に女性の織物センターの予算を消化することができず、2006 年度に持ち越すことになった。

マハルチャリの状況は、依然として入植者や軍による土地の収奪や占拠、果樹などの強奪やいやがらせが続いており、2005 年度の 1 年で、マハルチャリ郡の中に不当に建てられた入植者の家は数百単位で急激に増加し状況が悪化した。2006 年 4 月にはその流れから不法に土地を占拠し家を建てた入植者と入植者集団村の入植者が先住民族の 4 つの村を襲うマイシュチョリ襲撃事件が起こった。ジュマ・ネットでは事件後すぐ 1 名を派遣し状況をレポートすると共に、被害にあった 7 世帯とレイプ被害者 2 名に 3 ヶ月の支援を行なった。

## (2) 女性のための織物センター

4 台の機織機を設置し、パハルトリ村の女性達が研修を受け、織物センターは一時は稼動したものの、女性側の要望 (サラリーの額、トレーナー支援の継続) と運営する PBM 側との意見が合わず、プロジェクトの再調整が必要となった。そのため、新たに購入する予定だった 5 台の機織り機を購入を中止した。双方の折り合いがなかなかつかず、近隣のカルバリパラ村の女性たちがこのセンターに関心を持っていることがわかったので、今後はこの地域にセンターを移動し、女性たちを対象とした織物センターの再スタートをする予定である。そのため凍結した織物センターのための予算を、大きな被害を受けた女性たちへの直接支援へ変更した。(※ (5) 参照)

## (3) 奨学金の配布

小学生、高校生を対象に実施しているもので、襲撃からくる経済的打撃が子どもの教育への影響を出さないようにこの活動がつけられた。2 月および 7 月に 100 名の小学生および高校生に奨学金を配布した。この 100 名は支援がなければ学業を続けられない生徒たちだった。85 名が年に一度の進級テストに合格し、5 名の生徒が SSC というカレッジに進学できる資格を取る試験に合格した。

## (4) 果樹の苗木の配布

100 世帯に合計 3,000 の果樹の苗木を 6 月から 7 月にかけて配布した。各世帯に配布した苗木は 3 種類で、それぞれココナツ 5 本、オリーブ 10 本、ビンロウ 15 本が配られた。いずれも商用の木で現金収入につながりやすい果樹が中心である。ビンロウとは、バングラデシュでよく用いられる噛みタバコに使われる。しかし、今年の雨季は水が少なく、半数ほどの木が死んでしまった。残った半数は実になり現金化が見込まれている。

#### (5) 大きな被害を受けた女性たちへの支援

織物センターの運営の停止に伴い、さらに買い足す予定であった、織り機と糸代などの予算を凍結した。本来、レイプなど被害の大きかった女性たちを支援する予定の織物センターであったため、これら凍結した予算は、レイプをはじめとする、直接の被害を受けた女性たち 16 世帯へそれぞれ約 10,000 タカのクレジットサポートを行なった。女性たちはそれぞれ、学費にあてたり、家畜を購入したり、金貸し業のようなことをして利子を得るなど収入をえるための活動を行った。2年間のマハルチャリ支援事業の中で、常にレイプ被害者が支援対象からもれがちであったのは大きな学ぶべき点であった。

#### (6) 小規模商業活動

2年目の活動の柱は、この小規模商業活動を通じた、復興・自立を目指した村人の収入向上プログラムであった。被害にあった家族で構成されるグループ（39 世帯）を対象に、クレジットサポートが行なわれた。受益者の多くは子牛や子豚、子ヤギを購入し、育てたり、魚の養殖や、農業を始める世帯もあった。農業トレーナーが研修を行ない、指導を受けた世帯が支援を受けた。他にも売店や、コピーショップ、診療所の商売をするものもあった。

農業や家畜などは収入を生み出すのに時間がかかるため、今後も効果を確認する必要がある。売店やコピーショップ、診療所などは、すでに収入を生み出している。支援を受けた村人の反応はとてもよく、積極的に活動する様子が見られた。またすでに収入を得ている世帯では、子どもを学校に通わせることが出来たなど喜びの声も聞かれた。

#### (7) 3ヵ月ごとの集会の開催

268 世帯はマハルチャリ地域の 7つの村に分かれ住んでいる。それぞれの村で、「地域周辺で起きている様々な課題」「土地の収奪問題」「トラブルとの対峙の仕方」などについて話し合う場を年 3 回持った。毎回のミーティングには、PBM のスタッフが同席し、適宜アドバイスなどをいった。マハルチャリ襲撃事件の前後を通して、これらの問題は恒常化しており、復興プロジェクトの進行と同時に、土地に関する問題に注目する必要がある。また、同じマハルチャリ郡のマイシュチョリという場所で 2006 年 4 月に襲撃事件が起きたことから、今後もマハルチャリに注目していきたい。

### 活動の成果と今後の課題

この 2 年間の事業を振り返ると、目的を達成できたものと、予定どおりにいかなかったものとあった。順調に進んだものは、植林や果樹の配布、奨学金の配布、小規模商業活動や、集会や話し合いを通じたコミュニティ間の結束である。PBM と村人が協力し、襲撃事件で受けた経済的な被害をある程度のところまで復興できたと言える状態を現地で確認することが出来た。

逆に順調に進まなかったことは、被害女性のための織物センターの運営である。当初はレイプ被害の女性たちの自立支援の名目であったが、結果的にレイプ被害女性たちは「場所が遠い」「織物事業にあまり関心が持てない」などの理由に参加することがなかった。結果的に家が焼かれるなどの被害を受けた女性たちがこのセンターの運営を担ったが、市場での販売価格が非常に安かったこともあり、次第にこの事業に関心を失ったことである。そのため、2年目の織物センターの予算は、レイプ被害を受けた女性たちの収入向上のためのローンとして急遽支出することにした。織物センターは、関心を持っている近隣の被害を受けた村に移動する予定である。

2年間で復興事業は順調に当初の目的を果しつつあったが、この地域でUNDP（国連開発計画）が大規模な開発事業を始めたため、ジュマ・ネットの活動と重なる部分が出始めてきた。そのため3年目の活動をこれ以上同様の事業を継続する必要がなくなりつつあると、現時点では考えている。ただ、襲撃事件で深刻な被害を受けた世帯が残っており、その世帯への部分的な支援をジュマ・ネットとしては考えている。

#### チッタゴン丘陵先住民族持続的社會開発プロジェクト会計報告

(円)

現地送金額	1,500,000
-------	-----------

支出	
苗木	82,116
肥料	191,004
子供の奨学金	108,000
スタッフサラリー	183,600
トレーナー	18,000
夜警	32,000
4半期ごとのミーティング	18,154
事務所家賃	43,200
事務・文具費	5,400
管理費	64,006
会計監査費	14,400
小規模ビジネス活動	444,920
大きな被害を受けた女性たちへの支援	295,200
合計	1,500,000

(上記の費用のうち、800,000円が庭野平和財団からの助成金である)



織物センターの女性たち



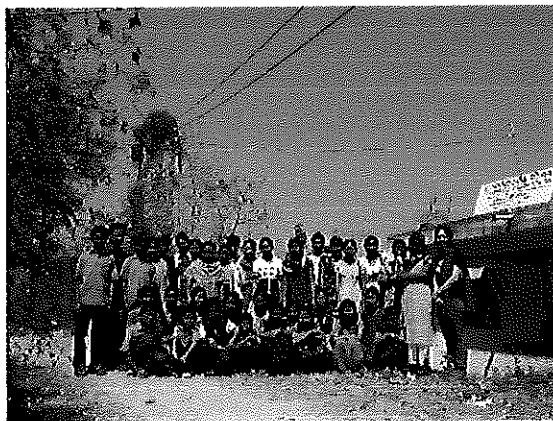
苗木の配布



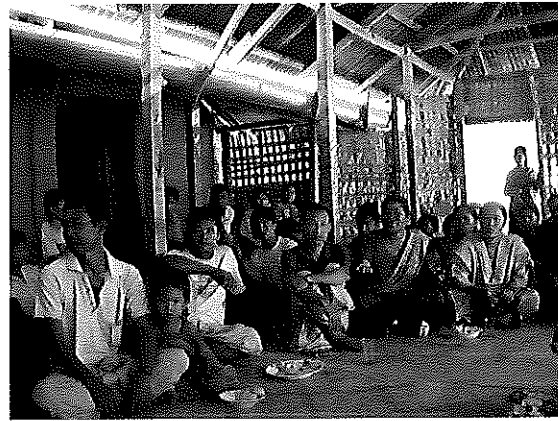
小規模商業活動 コピー屋さんを始めた受益者



豚を購入した受益者、多くは牛、豚、ヤギを購入した



奨学金を受けた子どもたち



ミーティングをするレムチョリ村の村人、受益者もいる